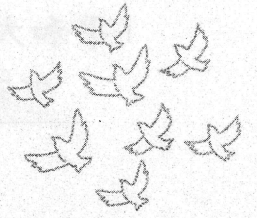


「平和大使として学んだこと」

今ぼくができること



新川 小学校 6年 氏名 尾崎匠悟

八月五日、ぼくは平和大使として広島に行きました。広島の時を見た時、本当に七十九年前ここに原爆が落とされたのか、と思いました。でも被爆体験伝承者のお話を聞いて原爆が落とされた時の様子を知りました。お話はともわかりやすかったです。聞いていただけで怖くなっていました。皮ふが火傷で垂れ下がっていた人の話や、た一発の原爆子爆弾のせいで家や家族を失った人が大勢いた話でした。一番心に残ったのは死んでしまった赤ちゃんを背負っている母親が、ご飯をくれと言っていた話です。ぼくは戦争とは悲しいだけだと思いました。

それから広島平和記念公園に行きました。実際に見た原爆ドームはかべがボロボロで原爆のおそろしさが伝わってきました。原爆の子の像では流山市民の方から預かった千羽づるをけん納しました。千羽づるはすごい数があったので平和への願いがこなにあるんだと感じました。

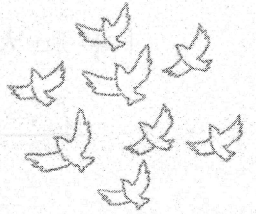
原爆資料館では入ってすぐ血だらけの少女の写真におどろきました。焼けた弁当箱や黒い雨がしみた服や三人の中学生の遺品も見ました。自分と同じ年代の子どももたくさん亡くなっている悲しくなりました。ぼくは原爆のおそろしさを知って、二度と原爆を使ってはいけないと思いました。

八月六日、平和記念式典に参列しました。毎年テレビで見っていたのでわかっているつもりでしたが、行ってみるとテレビではわからないいきん張感がありました。

ぼくは広島に行く前は戦争とは遠い昔、遠い所で起こった事だと思っていました。でも広島に行ってみて戦争の悲しさを知りました。そして第二の広島、長崎が絶対に出てはいけないと思いました。世界では今も戦争している国があるので全然平和ではありません。まずは広島で感じた事を家族や身近な人に話をする、ぼくができる最初の一歩だと思いました。

「平和大使として学んだこと」

世界の平和



東 小学校 5 年 氏名中野芽依

「ごーん」昭和二十年八月六日広島に、「ごーん」昭和二十年八月九日長崎に、二発の原子爆弾が落とされました。そこにしていた人々はすべて奪われました。家族や友達とともに過ごすはずだ。たのに、街が火の海になってしま。たのです。原子爆弾投下について知ったとき、私は広島だけではなく、長崎にも原子爆弾が落とされてたことをけして忘れてはいけないと思いました。

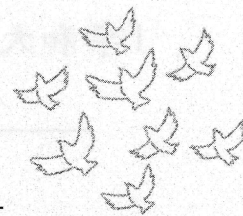
私は広島島の爆心地から半径五百メートル以内の近距離にいて、生き残り、た七十八人の人々について考えました。今、生きている人は二〇二三年だと九人になってしまいました。でも、前向きに生きていて、苦しいけれど生きることをあきらめなくて感動しました。

被爆者の中では、「二度くり返させない」と思。て語る人、この非劇を言いたくない。と思。ている人がいます。そのことに私は、どちらの選択も周りを思。ているので心がつまりました。

広島へ行。たことで、きょう味をもち、家で原子爆弾投下についての関連動画を見ました。分。たことがあります。それは、米兵も原子爆弾の被害を受けていたことです。昭和二十年七月二十五日、アメリカは原子爆弾を日本に投下することを決めていました。決めた時、唯一味方が収容所にいないと思われていたため、場所は広島に決まりました。その頃、アメリカは軍港のある広島県呉を空襲していました。墜落したアメリカの戦闘機があり、つかまつた十人ぐらいの米兵は広島市へ運ばれました。だから、投下の日に米兵は広島にいました。米兵も被害にあ。てたことにおどろきました。でも、広島の人達がお墓を建てていたこともおどろきました。

一九四六年九月一日から一九四五年九月二日までの約六年間、戦争がありました。日本では約三百万人の人が亡くなりました。世界だと、四千万人から五千万人もの人が亡くなりました。私は人が亡くなれすぎたと思います。

「平和大使として学んだこと」

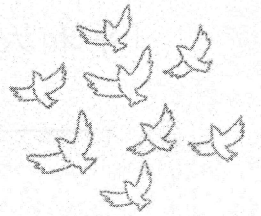


小学校 年 氏名 中野 芽依

した。人の上に立ちたい、領土の奪い合などの理由があったとしても、戦争をすることはだめだと思います。人の命は大切にしたい。そして、「世界を平和にするには」と思ったり、死について考えることが必要だと思います。

「平和大使として学んだこと」

他人事と自分事



江戸川台小学校 5 年 氏名 高谷 遼平

ぼくが広島で学んだことは、「平和の尊さ」である。これまでも原爆に関する本を読んでいたが、この原爆が最も恐ろしいことだと改めて実感した。

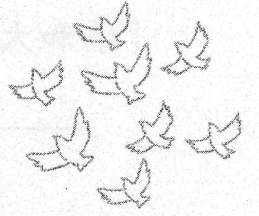
一番印象に残ったのは、広島平和記念資料館にいくつも飾られていた写真の中、ある一枚である。それは、「焼け野原の広島市」の写真である。原爆投下された時、中国地方の一帯荒れ果てたのが広島であった。しかし、原爆による爆風と熱線と放射線によって、一人のうちの町全体が焼け野原になり、人も犬も猫も何もかもが形もわからないような状態になった。また、原爆が投下されたとき、ぼくと同じ子供だった被爆者の話をしてくれた伝承者からは、被爆当時のものすごい爆風の様子や、はたして必死に逃げたときの様子、動くことができなかったおじいちゃんをおいて逃げた罪悪感のこと、原爆後には、黒い雨のことなどを聞いた。

ぼくは、もし自分が一人で生き残ったとして、どうやって家族を探したらいいのだろうと思う。またいつ爆弾が落ちるかもしれないし、どこに逃げればいいのかもわからないし、食べるものも飲むものもないかもしれないし、もうすでに家族は死んでいるのかもしれない。今は、だれとでもつながることができ、いろいろな携帯電話という便利なものがあるが、すぐに使えなくなると、ただの機械でしかない。そんな状況の中、焼け野原になった町を一人で歩き回るのが、とても苦しかった。七十九年前の遠い過去の話であったが、原爆が、他人事ではなく、急に自分の事のように感じられて、戦争はあてはまらないものだと強く思った。

広島平和記念資料館見学の際には、「広島市平和祈念式」に出席した。「ヒロシマ」の原爆は世界中に知られており、式典にはたくさん人の国の人々が出席していた。ぼくが広島を訪れたことで、他人事ではないと思った。た

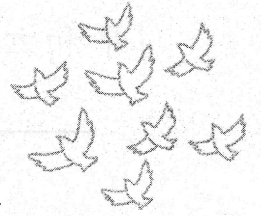
「平和大使として学んだこと」

他人事と自分事



江戸川台小学校 5年 氏名 高谷 遼平

多くの人に実際に広島に来て、見て、聞いて、
感じてほしいと思った。それと同時に、原爆
という過去があっても、しっかりと人の力で
立ち直って、いかに強い広島の様も見てほしい
と思った。



流山市立流山小学校 五年 氏名内川 隼成

ぼくは、原はくについて知った時に、心ぞうが、飛び出しそうになりました。ぼくは、平和大使になって、より強く、戦争は悲しい事だと思いました。罪のない人達の命が、多くうばわれ、生きたまま焼け死ぬのです。ぼくは、平和資料館に行つて、どれだけ多くの人が、つらい思いをするのかを、改めて知りました。子供が死んで、目を開けて、とさけぶ親、水を飲んだら死んでしまうのに、水。とさけぶ人達かいた事を知り、むねが痛くなりました。

原はくがおそろしいのは、ぼく発した時だけではありません。放射線の混じった黒い雨がふりました。それをあびると十年後、二十年後に、病気になるて死んでしまう人が、たくさんいたのです。それを分かつていても、のどがかわいて、その雨を飲もうとした人もいたと知り、悲しくなりました。ぼく風で吹き飛ばされ、建物の下じきになった人もいっぱいいたのです。窓ガラスがわれ、体につき

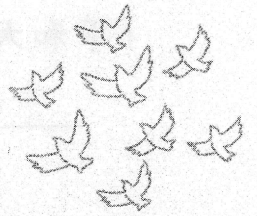
ささ。た人も、いっぱいいました。そもそも、戦争になつてからは、ずっと、ろくが食事も出来ず、ご飯は少なく、さう草が入っているほどでした。勉強をしたくても国の命令で、仕事をさせられたり、大学生は兵隊にさせられていました。その時代に生まれた人達の気持ちを考えて、涙が出ます。

私達は、二度と同じあやまちをくり返さないように、世界平和を實現しないといけないのです。千羽するで願いを伝えるだけでなく行動にも表わさなければいけないのです。それは、大きな事をするという事ではありません。近くにいる人達への「小さな気づかい、思いやり、そして、今自分に何が出来るのかを、もう一度、考えて行動していかないといけない」と思いました。そうすればきっと、自然に笑顔いっぱいになると思います。世界の一人一人が、何か行動していけば、大きな力となり、きっと世界平和も實現できるとぼくは思います。

「平和大使として学んだこと」

原爆の恐ろしさを伝えていくこと

八木士七 小学校 5 年 氏名 長田 晃人



「平和大使」として、実際に広島に行き、た
ぼくは、資料館で被爆した人の遺品を見たり、
被爆体験伝承者の方の話を聞いたり、平和式
典に参列し、原爆のことを平和のことをたくさ
ん考えました。

被爆体験伝承者の方の話の中で、実際に被
爆体験をしたさしだひろこさんについての話を
聞き、原爆をとて恐ろしく感じました。

原爆はたくさんの方々の命を奪い、命だけで
なく一瞬で人々の幸せや日常を壊したからで
す。さらに、原爆が落とされた後も放射線や
後遺症で苦しむ人が大勢いるからです。特に
印象に残ったのは原爆の被害についてでした。

爆心地の近くの地面は二千度から四千度にな
り、爆風は風速二百メートルほどありました。

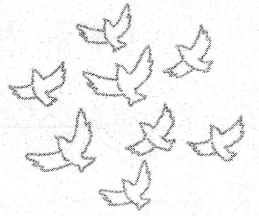
上からの風で押しつぶされそうになり、地面
の熱さで苦しみがなぐさむようになっていく人が大
勢いました。それを見て助けられなかった人
も苦しかったと思います。さらに戦争中は食
べ物も不足し、水をあまり飲めず、家族とも

離れて暮らし、勉強も出さず、子供でも戦う
練習をしていたそうです。ぼくは広島でこの
ような話を聞いたことで今ぼくが当たり前に
できていることがこの時は当たり前ではなく
今がとても幸せなんだがと知るこゝが出来た
と同時に二度とこのようなことが起こるこゝは
いけないと強く感じました。

そして平和大使のぼくには何ができるぞろ
うと考えました。まずは、世界唯一の被爆国
である日本で生まれた以上、平和や原爆のこ
とについて深く考えなければならぬと思ひ
ます。広島に行き、たくさん学んだ経験を活
かして、それを家族や友達、周りの人々に原
爆の恐ろしさを伝えていきたいです。ぼくは
実際に原爆の被害を経験したわけではありま
せん。ですが被爆した人の想いやその経験を
無駄にせず、絶対に忘れないようにしていま
たいです。

「平和大使として学んだこと」

平和と原爆



流山おおたかの森小学校 6年 氏名 川崎 真実

「平和大使」を終えた今、私が皆さんに伝えたいことは原爆や核兵器の恐ろしさについてです。

まず、被爆者伝承者の方のお話では、広島で起こった原爆の被害についてお聞きしました。戦争のために学生が家をこわす仕事をしていた時、家族から離れて生活していた時、戦争で亡くなった家族を思い出して悲しんでいた時、楽しく友達と遊んで幸せだった時、たった一つの原爆でしかない衝動の中、た

くさんの人々にむかっていた広島が今までの広島ではなくなっていました。

原爆や核兵器は一発で人を悲しめ、苦しませ、心を痛ませ、多くの人も極限まで追い込んでしまふ、そんな恐ろしい核兵器です。

次に、資料館では原爆で犠牲になられた方々の資料や残された言葉を拝見しました。黒い雨で命を落とした人、ものすごい爆風で亡くなった建物の下敷きになり、追ってくる炎に焼かれた人、たくさんの方が犠牲者で広島は埋め

くされました。資料館には生きたまふ焼かれた人の写真、遺品などがたくさんありました。資料館だけでも、怖いと思っただけですから、広島ではたくさんの方が怖くて心細かったです。

原爆は生きたくても生きられない、そんな人を生かだしてしまふ、残酷な核兵器なのです。

一九四五年八月六日午前八時十五分

式典に参加した時、平和への思いを込めて黙とうをしました。

たくさんの方が亡くならず、今も幸せに生きていたかもしれない、家族と再会し、笑顔で今を過ごしていたかもしれない、そんな先の分らない未来を壊してしまっただけの原爆です。

今の平和はあの日の原爆の犠牲になつた人たちが、被爆した人たちに守られている、ということをお忘れしないでください。